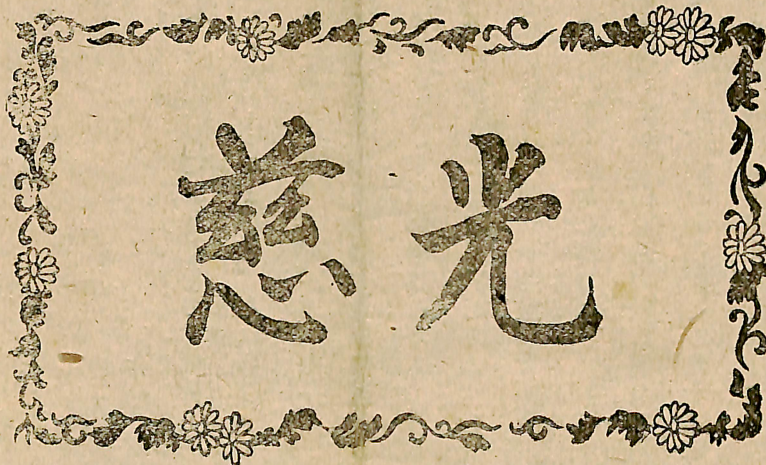


昭和二十四年四月一日發行（毎月一回一日發行）

乞 傳 友 勝



第一卷 第一號

目 次

發刊の挨拶	花田正夫……………2
宗教的同朋	信仰余瀝より……………4
簡明なる信仰	山下成一……………6
遠く宿縁を慶ぶ	能戸得一……………8
好人淺原才市翁のうた	……………9
あとがき	……………10

昭和二十四年  
四月號

# 發刊の挨拶

花 田 正 夫

今回の敗戦によりまして、信仰上の良書が殆んど廢刊になり、眞宗聖典さえも容易に手に入り難くなりました。それにひきかえまして、世相の混迷下に立つて、益々求道の聲が各地に起り、今日程切實な叫びの熾んすることはありません。或は二人の愛し子を戦死せしめたのを縁として翻然と念佛の慈懷に歸し。或は家を焼かれ愛兒を爆死せしめて大法に氣付き廓然として念佛申される人。或は外地より無一物になりて引揚げられて、浦島太郎の故事同様の身となつて初めて人生の大夢に氣付かれ。或は復員軍人の方で生活の方針を失ひ途方に暮れて聖人の御遺訓を聞き、念佛無碍の大道に歸り。或は長く村政に治蹟を擧げて來られ乍ら追放の破目に遭はれて求道に光を見出される。等々無數の信心の華が、敗戦の泥田の中から白蓮華の様に開き初めて居ります。これ全く「篤く三寶を敬へ」と宣らせ給うた聖徳太子の御仁慈と、九十年の御生涯を「信心一つ」にお歩み下され、私共のため久遠の御眞實を植え殘して下された親鸞聖人の御慈育の賜と存じます。斯うした求道の士から純信仰雜誌の發刊をしきりに求められて參りましたが、漸く機縁が熟しましてここに慈光誌を發刊させて戴きます。

誌名は淨土和讃中の二首

◎ 觀音勢至もろともに、慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも休息あることなかりけり

◎ 慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ 大安慰を歸命せよ

から「慈光」の二字を頂戴いたしました。恐懼ひとへに祖師聖人の御心にかなひ奉るよう、久遠の慈光が地上に建設されますようにと念願して居ります。

特に發刊に際しまして、深謝いたしますことは、常音先生の御寛容を得まして故近角常觀先生の玉稿を記載させて頂けましたことであります。私共は常觀先生の全集が一日も早く出版せられます日をお待ち申している者であります。今度誌上に玉稿を頂けましたことはこよないよろこびであります。今後共に御許の戴けます限り記載させて頂き永く慈育を蒙り度いと願つて居ります。

# 故近角常觀先生述 宗教的 同朋

(信仰餘瀝より轉載)

同朋とは如何なるものかを考へねばならぬ。世間では共に遊び共に食ひ互に往來をすれば直に同朋と言へど、こは決して眞の同朋とは言はれぬ。眞の同朋とは互に心を知り合ふ事である。心を知り合ふと言ふは他人の幸福あるときは自分の幸福の如く之を喜び、自分の幸福あるときは他人と其喜びを分つのである。随て又自分に災難あるときは遠慮會釋なく打ち合けて助けを求め、其の代りに他人に災難あるときは自分の災難の如く心得て命にかけても之を救ふ氣になるのである。「士は己を知るものために死す」とは誠にこの人情のこまやかなる所を言ひあらはしたものである。此の如く相互に他人の利害を自分の利害と心得て、自然に情が溢れ、思はず知らず共に喜び共に愛ふる様になる。かくなる以上は身体は二ツに分れても心は畢竟一ツである。所謂同心一体とは實に此の言ふべからざる微妙の味である。

抑々吾人は實際日常の交際を考へて見るがよい。全体人間は不完全のものなれば、誰も交際をする内には、あまり深く話し合はずとも何となく懐しき人もあり、又何となく氣の進まぬ人もある。其の時對手の人は如何なる心持で居るかを考へて見るがよ。此方より懐しく思ふときは必

ず對手も懐しく思うてゐる。此方より氣の進まぬ時は對手も同様に思うてゐるに違ひない。かく心と言ふものは互に照し合ひ通じ合ふものである。

然るに人間は自分勝手のもので、自分が對手に對する情の如何を顧ず、唯先方の心を付度して不人情であるとか無慈悲であるとか、兎角邪推するものが多い。凡そ世間一家の不和より一國の大騒動に至るまで、本を資せば僅か此一點人情の行き違ひより起るのである。こは甚しき心得違ひである。全体對手が自分を如何に憶うて居るかを知らんとせば、先づ自分が對手を如何に憶うて居るかを尺度として計算すればよい。此方が五分憶へば必ず對手も五分憶うて居るに違ひない。互々の情の通ひは丁度秤の如く平均するものである。されど時として一方は非常に親切に考へ、一方は却て之を怨に受ける場合がないとは言へぬ。されどかやうな不平均は永く續くものではない。必ず善き方が悪しき方が何れかに平均するものである。而して善き方になるか悪しき方になるかは辛抱の強き方が勝つのである。万が一親切の人の辛抱が強ければ、終には怨に受けて居る方が氣が付いて自分の邪なるを後悔する時節が来る。是が善人の感化の徳といふものである。

然るに兎角人間は悪しき方が勢力強くして親切の方は辛抱負けをするものである。今迄親切の心掛けをした人が「是程の親切を盡すに飽くまで之を怨に受けるはいかにも

れ、闇の世界も夜があける。此の様なる人は慈悲深き人と云ふよりは、寧ろ慈悲が凝り固まりて人となつた者といふ方がよい。

しづとい」と言ふ様に、一點自分の親切に眼がつきて先方の無情を怨む心が生ずれば、今迄の親切心が一轉して其の儘怨みの心となる。すると怨に受ける方は益々怨を増す様になる。かくなれば悪人の勢力で善人を引き落したのである。實に怖るべき事である。而して世間實際の状態は如何といふに、決して善の勝つことはなく、互に日夜他人を惡へ落とし合ひをしてゐるのである。相率ゐて一歩々々惡道へ墮落しつゝあるのである。かく言へば人間を甚しく惡く見たる見解なりと言ふ人もあらむ。されど論より證據他人の事は兎に角、自分が果して親切を以て勝ち誇れるまで辛抱が出来るや否やを顧るがよい。諸君は兎に角私は如何程我慢してもとても出来ぬ。かく考へ來れば我は罪惡の塊に違ひない。私の周囲はまるで闇の世界である。然るに萬々一親切なる人ありて、私の所作をつくづく眺めて憐むべき者と

して私はこの友人を持ちながら今迄其親切に氣が付かんだ。實に佛陀は此の方である。かく氣を附けられた一刹那に佛陀の慈悲が全身に浸み渡つた。佛の光が胸の奥まで徹したのである。我が心は佛心に融かされた。實に同心の最大良友を得たのである。實に是れ我が精神界の生命である。而して翻りてみれば眞實の佛教徒諸君は、何れも同じ佛心に融合されたのである。して見れば眞に相互に同一佛心と交りたる同心一体の宗教的同朋である。釋尊が親友なりと言はれたるも、親鸞聖人が御同朋御同行と言はれたるも決して讚辭ではない。

と思ひ、私が其親切なる忠告を拒めば、之を不便と思ひ、遂に私が其人を怨み其人を打たんとするに至るも、怨むだけ可愛がり、打たんとする手の下から涙を以て眺めて居る人あらば如何。いかなしづとき私も此の如き友人が全身込めた同情の涙は唯一滴で五臟六腑にしみ渡り、身も心も融け合う心地してその友情の深きに感化せられ、其の親切の厚きに感泣して、油然として感謝の念を生じ、自から頭が下りて慚愧に堪へぬ。實に此の如き友は二人とはいらぬ。唯一人あらば充分である。如何な罪惡の塊の私も融かさ

今日世間にて政友とか學友とか稱する者は、多くは利をみて相集る小人の朋黨である。決して正義の下に集る君子の朋黨ではない。故に利を得れば直に離合集散勝手次第である。此際吾人は信仰を媒とし、何れも佛の心を心とし、國民全体を宗教的同朋とせねばならぬ。この目的を以て同盟を結びたる次第なれば、實に信仰は同盟の生命である。眼目である。若し信仰の生命なくば幾千萬人集り來るとも恰も龍を畫きて晴を點せぬも同様である。

信仰は私共の愚悪性に迷ひぬく現實の苦惱を救はせ給ふ絶對な佛様の大慈悲を何の計ひもなく素直に感戴し信じて仰ぐの謂れであつて、至つて至簡至明な道理を體驗する外ありませんが、私共はいつまでもその大悲心を戴く事が出来ず、頗る複雑難澁に思ひ過して居るのであります。大經に「往き易くして人無し」とありますのも、その計ひ心の爲に佛様の御心が通ぜず、即得往生すべき安養の樂邦へ往く人がないと謂はれたのであります。此の計ひ心が飽くまで入信の邪魔をなし、信仰をむつかしくするのであります。「難中之難無過斯」と説かれてあるのも、此の計ひ心の己み難い爲であります。

然し佛様はその計ひ心をやめてから信ぜよと仰せらるゝのでもなく、又計ひ心のまゝでよいと仰せらるゝのでもなく、私共が如何に計ひ心をやめたくとも、思ふやうにやめ得ない程に迷ひの深い奴を、いよくお見ぬき下されて、その計ひ心がいつまでも己まぬのでサツ苦しい事であらうと、如何とも致し難き私共の心の行詰を限りなく悲感して下されますので、かゝる超世無上な廣大無辺な御眞實に對し奉りては、如何に我慢強情の私共も、其の角を打ち折られ降参してしまふ事になるのが信仰の心であります。又如來様は「其の計ひ心をやめて來れと私共に註文しても、と

の、佛様の天地六合にひゞく大眞實に融化さるゝ事が信仰であります。

つら／＼自己を内省し忌憚なく心内の機微な點をもよく見つけますと、私共は身も心もいかに根強い罪業の綱に固くしばられて居て、一分一厘も自由の分なき行詰詰りに陥りて居る事を發見するのであります。偶々私共は善事と信ずる事をなせば、その善といふ名に目がくらんで、いつしか善人になりすましたやうな自惚れ心を生じ、四圍の人より優れてゐるやうな風に過信し、進んでは人にこれの善行をみとめさせたい様な野心まで萌え出て驕慢な顔をするやうになり、人が己れの要求通りに認めもせず又褒めてもくれない時は、己れのみによく名利の野心を棚に上げて人を恨み世を咀ひ神佛をも誹り或は自暴自棄になりまのが、悲哉私共の實際であります。此の場合は善事を成した事によつて却て自己の醜惡を曝露した事になるのであります。又うそにでも褒めて貰へば、その賞讃が少し誇大であると内心に思うても、高からぬ身をうごめかして虚榮心を満足し、又露骨に私共の弱點を揚げて忠告して下さる人に對しては、その眞實の親切を感謝せずして、却てそんなに悪口を放つて自分を侮辱せすともよいと、内心不平不満の念に燃え反抗・呪咀・怨恨・復讐等あらゆる劣悪な情の湧き出づるを禁じ得ないのであります。何といふ愚悪業でありませうか。殊に善といふ名にかくれて名利の刃をとぎつゝも、然もその眞相に氣づかないので、何時までも心の變態なる偽善を行ひつゝ得々として居るのであります。之を正信偈に「様惡善惡凡夫人」と頌されましたのは、善凡夫人も亦結局佛陀の大慈悲に救はれねばならぬ惡凡夫人で

あるとのおいしましめであります。何といふ鋭い御批判でありませうか。

然るに佛様は、かゝる淺ましき罪障にのみ朝夕まどひぬる私共凡愚人を引き受けて、ドコ／＼までも重擔して下さるのであります。何といふ有り難い極みでありませうか。佛様は私共が久遠の昔より流轉するすがたを、久遠の昔より、よく／＼しるしめして、絶對の迷妄に泣く私共の業苦のありたけを救ふべく五劫の間思惟あそばされて、無量の光明と無限の壽命とを、わさ／＼私共の爲に御用意下されて、「あくまで我をたのめ、我は汝の親なり」との切なる仰を戴いて見れば、唯々一心に一向に、余念なく二心なくその大慈悲心に感動し奉り心から信賴し感謝し奉るばかりであります。

一度斯くの如き廣大なり御念力に引き受けられて見れば、最早やその中間に何等の問題もあるべき筈なく、何等の疑も惧もなく、唯ほれ／＼と御恩の廣大な事を仰ぎて稱名し奉るばかりであります。佛様と御一所ならば、たとへ地獄へなりとも御伴させて頂きませうと、信順・渴仰・歡喜・充足等の念が交々禁ずる能はざる事になるのであります。

かくて、始めてあらゆる計ひから放れて、無碍の大道に出でられ、自然に法爾に佛様の不思議な御計ひに計はまいらせて、あるべき様に身を處して、歩々大悲の眞實を吸しつゝ世を生き抜く事になるのであります。

かくて人生五歩々の相對に執着し身動きも出来ざりし身も心も、いと輕ろ／＼となり、始めて實際生活に於ては「やる丈はやらせていたゞく」心の余裕を（九頁へ）

遠く宿縁を慶ぶ

能戸得

おのれ廿三歳の秋肺炎カタルに冒され、當時信仰の何たるかを知らずして此の病難に直面し懊惱苦悶言語に絶するものありき。或は医薬に或は方術に焦燥兩三年、肉体的に回復する所ありしも、未だ衷心の安定を得るに至らず。靜岡療養中偶々上京の機あり。先輩我を伴ひて求道學舎と九段求道會とに開法せしむ。時に明治卅八年五月、實にこれ近角恩師の御講話を拜聴する端緒にして、また法進に詣づる第一歩なりき。

御講話の一は「攝取の力」なり。その歸途心胸頗る開け愉快禁する能はず。思へらく這回の上京もと豫期せざりし所、况んや此の佛縁をや。冥々の威力既に遠き過去より我が上に加はらせられつつあるに非ずんばいづくんぞよく今日あるを得んと。始めて歎異鈔を得て歸郷し、爾來「求道」を拜讀して懇々切々の御講話を味讀す。この秋なりしと記憶す、恩師の懺悔録出づ。拜誦泣讀靈感今尚ほ忘るる能はず。

これより先、おのれ少壯の氣を負ひ家庭を改善し少妹の教育に意を用ひんとし、日々我が理想の實現に力む。しかも専ら他を責むるに急にして毫も自ら省みる事なきを以て、結果は常に所期に反し、焦慮止むときなく煩悶日に甚しかりき。

明治四十二年三月恩師當地方御巡講のことあり、歡喜措

く能はず。これおのれが直接恩師に面接を得たる最初なりき。御講話中選擇本願を宣べたまふや、愛兒のために苦心する慈母の手織綿の着物に比喻しだまひ、懺悔たへがたく感涙滂沱たりしは今尚ほ昨日の如きを覺ゆ。かくておのれ恩師の御教化によりて如來の大慈と我が罪業の深重とを知り、虛假不實の我が理想によりて家庭を改善する等と企圖せしことの如何に大なる驕慢なるかに氣づかしめたまへり。

今や、會て病苦に惱み家庭問題に苦しみたる四十年前を回想して、恩師の洪恩に及ぶ。唯々佛天の御計らひの不可思議なるを讃仰せずんばあらざるなり。

しかるにおのれの恩師に對し奉る眞に無慚無愧の限りなり。御病中一度も御見舞に伺ふことなかりき。御遷化も後日傳聞するに過ぎざりき。平生報佛恩の誓みや如何に。殊に恩師の常に力説したまひたる信界建現につき果して何をかなせる。此度名古屋求道會にて、光誌御發行と拜承して、先づ胸をうちしは實にこの一事なりき。

我が罪業の深重なる、ひとり恩師に對してのみに非ざるなり。二代六十六年を顧み來れば、うたた一生涯惡値弘誓の感にたへず。特に母を短命に終らしめ父を急逝せしめたる少妹を夭折せしめ長妹を早世せしめたる、近くは養嗣子を

病没せしめたる、いづれか我が宿業に非ざらむ。阿闍世王の逆惡も我には遠く及ばざる所ならずや。

翻て我が現在を見よ。惡念邪心の去來して暫らくも止まぬ我なり。朝夕小言の絶えぬ我なり。自らの聾を省みずして他人の言を低聲なりと憤る我なり。「惡性更に止め難し心は蛇蝎の如くなり」「極惡深重の衆生は他の方便更になし」よくも我が心中を道破したまへることよ。

かくの如き罪業の我を、あくまで御見捨てなき佛の御

(七頁ヨリ)

恵まる、のであります。換言せば人生相對のま、にその相對を超越しそのまゝ絶對性を感じ、人生に逍遙遊し得る幸慶を得、始めて眞に相對の完成に近づき得るのであります。念佛は世を超える聲であつて直に世に入る聲であります。此の大慈悲を頂く外に「こうわかつた」の「あゝいただいた」の「かくあるべき」と一點計ひの殘る余地があるならば、それは純信の行者にあらずして、むしろ大に警戒を要すべき事でありませぬ。

信仰とは何か複雑玄妙な思想を味ふ事かと思つてゐたらむしろ私共の複雑を佛様にとられて丸裸にせられ、唯南無阿彌陀佛の一ツにせられてしまふ事でありました。唯感謝の單一素純な生活にさせられてしまふ事でありました。是より外に他力廻向の大信心はないと思ひます。何と簡明な信仰ではありませんか。

眞實他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり何たる不可思議の誓願ぞや、何たる廣大無邊の御慈悲ぞや、唯懺悔稱名し奉るより外なきなり。この遣る瀨なき御眞實を此の濁惡邪見の我が心に届けたまへる恩師、既に世に在さず、御令室様亦御後を慕ひたまへり。今や相携へて淨邦より還來したまひ、我が淺ましき生活を見をなはし慈心切切、濟度してしばらくも息みたまふことなかるべし。南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

好人 淺原才市翁のうた

をや二人ではなしをすれど  
見えぬお顔が 南無阿彌陀佛  
わしがこゝろは散つてどもならん  
ちらば散れ 南無阿彌陀佛  
あるこゝろ彌陀にとられて南無阿彌陀佛  
たすかるとは そりや無理よ  
たすけてあることの南無阿彌陀佛

才市よかいへ 他力をきかせんかいへ  
他力自力はありませぬ  
たゞいたゞくばかり  
これ才市 よろこびはあてにわならぬ  
消えてにけるぞ  
逃げぬお慈悲は 親の慈悲

# 編集後記

△近角常觀先生の宗教的同朋の一文は、先生の二十九歳の御時の宗教的大煩悶の末、忽然として佛の大慈悲心に徹到されて、初めて筆を執られた御草稿であります。靈感全文に溢れ、慈光瀰々として輝く御德音であります。

爾來明治大正昭和の三代にかけて眞宗信仰界の大明星として御活動下さいましたが、太平洋戦争開戦の五日前、御往生されたのであります。御筆蹟は今更ら申上げるまでもありません、唯親を失うた者が一層親を戀ひ慕ふやうに、恩師の御慈育を慈々渴仰申すばかりであります。

△山下成一先生は御壯年の頃近角先生の御縁に遭はれ、深く眞宗に徹せられて、長く台北市で台湾求道會をおこして居られましたが、今度の敗陣で御引揚げになり、御郷里の常滑町に歸られました。今度本誌發刊の事を申上げましたところ滿腔の御賛同を得まして、月々の原稿も御送り下さいますことになり誠に感謝に堪えぬことであります。本誌の先生の御原稿は御舊稿と承りますが、眞宗信仰の眞髓を最も簡明に御述べ下さつたもので、先生一枚起請文にも相當すると深く感銘申して、ある次第であります。何卒頭だけでなく生活上の上に引きあてて御精讀願ひます。

△能戸得一氏も近角先生の御慈育を蒙られた方でありまして、本稿は氏の御生涯の縮圖と

も申すべき明文でありまして、日頃から氏のいかにも謙讓無私にして篤信な御生活を知る私共には、誠に得難い御告白であり、厚く御禮を申す次第であります。

△紙數に限りがありまして、次回に譲らせて戴いた御原稿がありますが、折角御執筆下さいました皆様方に御諒承願ひます。

## 執筆者の御住所

山下成一先生 愛知縣知多郡常滑町市場  
能戸得一氏 岐阜縣海津郡今尾町今尾

## 談話會御案内

毎月二日午前午後 山下成一先生信仰座談會  
於山下先生御宅

毎月六日二十八日午前午後 本田惠孝師、於  
市内中川區岩塚町林高寺

毎月第一日曜、午後一時、市内中區門前町西  
別院、毎月十三日午前午後、市内昭和區北山  
町教西寺、法話と座談、花田正夫

## 良書推薦

### 人格と理想

著者 廣島文理大學教授文傳白井成允先生

發行所 京都市下京區堀川通花屋町  
百華苑 定價、送料は御問ひ合せ下さい

### 求信の一路

著者 文學博士 福島政雄先生

發行所 京都市下京區花屋町西洞院西  
永田文昌堂定價と送料は御問ひ合せ下さい

### 親鸞聖人の生涯と信仰

著者 佐々木圓染師 發行所 京都市下京區堀川通花屋町百華苑 定價二三〇送料一〇

昭和二四、三月八日、花生記

昭和二十四年三月 印刷	昭和二十四年四月一日發行	毎月一回一日發行	定 一部 金拾圓	價 一年分金百拾圓	（郵共稅）	名古屋市昭和區幸樂町二丁目二十九番地	編集兼 發行所 花田 あや	名古屋市千種區千種町馬走	印刷人 本 伍 郎	名古屋市千種區千種町馬走	印刷所 千草印刷所	名古屋市昭和區內幸樂町二ノ二九	花田正夫方	發行所 慈光社
-------------	--------------	----------	----------	-----------	-------	--------------------	---------------	--------------	-----------	--------------	-----------	-----------------	-------	---------

振替ナツヤ一〇四七〇